



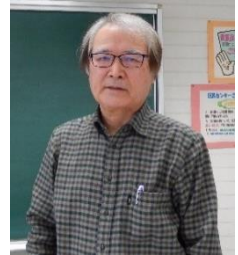
[令和 2 年 2 月 12 日 定例会発表要旨]

手稲開基となった仙台藩片倉小十郎家臣団入植とその後の経過

手稲郷土史研究会 会員 村元健治

■ なぜ片倉小十郎家臣団の入植問題を取り上げるのか…

今なぜ、入植問題に触れるかということ、一つには、手稲の「開基」は仙台藩白石の片倉小十郎家臣団一行が札幌の白石に移住した人々と別れて上手稲（現西区西町および宮の沢）に入植したことにあるのだが、このことが手稲区民に意外と知られていないと気づいたからである。もう一つは、この入植が明治 5（1872）年となっており、令和 4（2022）年には「手稲開基 150 周年」を迎えるからだ。区民の関心と興味も高まることが予想され、手稲郷土史研究会においてもそれに応えるべく研究を進めていく必要性が感じられるので、あえて取りあげた次第だ。



上手稲に入植した片倉家臣団のことについては、現存する資料が白石と比べて非常に少ないというハンディがある。しかし、そうした中で貴重な資料として残されているものが、本報告で使う『湯村家文書』だ。これは家臣団の一人だった湯村生幸の経歴はじめ家臣団の上手稲入植前後の経過等を綴ったもので、生幸から数えて四代目に当たる現当主の幹夫氏が 108 点にもなる同家の文書等を札幌市に寄贈された。今回はその中から「片倉家旧臣石狩国札幌郡上手稲村移住及開村之調」と「荒蕪地復旧御払下ノ儀願」を用いたい。※2 点の文書は「新札幌市史」機関誌『札幌の歴史』第 48 号に掲載されている

■ なぜ家臣団は白石と手稲の二手に分かれたのか…

戊辰戦争敗北後の片倉家臣団の北海道移住にあたって最大の疑問点は、なぜ一部が手稲に入植することになったかだが、実は上陸前に起きたある出来事が関わっているのではないと思われる。

『湯村家文書』ではその出来事について「九月二十日夜間渡島国上磯郡泉沢村沿岸ノ暗礁二触レ破船ノ難二陥リ直チ二同地二上陸ス。幸ヒ海上平穏ニシテ人員二怪我ナシト雖モ…」と記している。

『新札幌市史』ほかにあるとおり、先発隊の 400 余人を乗せ仙台の寒風沢を出港した「威臨丸」が泉沢村（現 木古内町）沖のサラキ岬にて座礁したのである。難破の原因については、種々取り沙汰

されているが、問題は、乗員の救助方法を巡って引率リーダー間でかなりの確執があったというのだ。詳細は省くが、一触即発寸前まで至ったと伝えられており、どうもこのことが要因となって対立が生まれ、結局は白石と手稲とに分かれて入植したのでないかということだ。

もっとも『湯村家文書』では、この経緯は一つも触れていないし、また公的な出版物にも書かれてはいない。それゆえ推測の域を出ないのだが、ノンフィクション作家の合田一道氏らはそのように指摘している。私も首肯はするものの、たいへん微妙な問題ではあるようだ。



上手稲開村記念碑
(西区西町南 21 丁目)

■ 養蚕と果樹生産に先駆的役割を果たした旧藩士たち…

入植後、零細規模で用水確保にも事欠く土地を与えられながらも、旧藩士たちは先駆的な農業に取り組み、たゆまぬ努力を続けていく。

当時の上手稲の土地条件だが、『湯村家文書』によると、「新開地ニ此シ収穫ノ少ナキハ地質ノ劣等ナルヲ知り本村ハ将来農作ノ見込薄キヲ憂タリ」とある。要するに劣等地だ。これに加えて、開拓使から割譲された面積は一戸当たり換算すると4町弱(12,000坪)と決して大きくないところへ、「明治七年中 琴似及笈寒両村工屯田兵設置相成候際、該用地トシテ右御割譲地奥行三百間ノ内百五拾間別紙図面甲乙両号式ケ所上地相成…」と記されているように、割譲地の半分を屯田兵用地として取り上げられてしまうのだ。そもそも少ない面積が、一層少なくなった。さらに水の便もよくはなく、自費で水路(堀)を切り開かねばならないというハンディも背負わされたのである。こうした極めて悪い土地条件の中で、移住者たちが一筋の光明を見出したのは、故郷の仙台・白石から持参した蚕種と開拓使より交付された果樹苗であった。

まず取り組んだのは、養蚕だった。入植した明治5年に「携帯スル所ノ蚕種ヲ草廬ノ中ニ飼育シテ大ニ好結果ヲ得タリ」と『湯村家文書』にある。幸い、山野にヤマグワが自生していたこともあって「将来蚕業ノ起スヘキヲ認メタリ」として、以後、力を注いでいく。明治10(1877)年には20町を新墾し、10,000本にもなる桑苗を植栽して民間レベルでの嚙矢となる桑園計画を樹立する。同11(1878)年、開拓使からの開墾費貸与による桑園10数町の開設。同29(1896)年には「札幌上手稲種製造組合」(組合長 湯村生幸)の設立と、積極的に養蚕に取り組む様子が窺える。

もう一つの振興策であった果樹生産については「果樹ハ本村ノ地質ニ適シ生育最モ好ク結実ノ美ナルヲ以テ大ニ之ヲ栽植シタリ」として相当期待をかけたようだ。明治8(1875)年に「官ヨリ果樹苗ヲ下付セラシ栽培ノ事ヲ奨励セラル〈中略〉又特志者エハ特別ノ払下アリ」とあるように各戸に数本~数十本の果樹苗が交付され、上手稲でも果樹栽培が始まる。とくに旧藩士の小島尚友がナシの栽培を手掛けたのを機に、白井恒路、山岸惟孝らも積極的に取り組んでいく。この開拓使からの苗の提供は明治20(1887)年頃まで続くが、西野(上手稲村)・軽川(下手稲村)を含めて、果樹の中でも^{へいカ}苹果こと西洋リンゴの栽培がメインを占めていったという。

すでに述べたように、開拓使からの養蚕・果樹に対する様々な支援策が出されたこともあって、上手稲では、この両部門は順調に推移していくものと見込まれた。しかし、良質の蚕種と繭が思うように獲れなかったり、「芯喰い虫」によるリンゴの被害を蔓延させてしまったりなど、明治末期あたりから、それらは生産の停滞や衰退を余儀なくされたようである。ただし、その後の西野ではリンゴ栽培や水田耕作が成功し、昭和40年代まで農業が盛んだった。

手稲開基となった片倉小十郎の旧家臣団は、不利な土地条件にも決してめげず果敢に先進的な事業に取り組んだが、種々の困難に直面してそれらを根付かせることは残念ながらできなかった。だが、その果たした役割は極めて意義深く、貴重なものだったと言えよう。



手稲記念館所蔵の養蚕用器具



★ **札幌市文化財課主催の講演会に協力しました** 2月16日(日)、札幌市生涯学習センターにおいて『手稲記念館開館50周年記念講演会』が開催され、手稲郷土史研究会が作成した「手稲開基となった仙台藩白石城 片倉小十郎家臣団の入植」が参考資料として出席者に配られました。また、会場に置かれた会報「郷土史ていね」も好評のうちに捌け、当会の活動をアピールすることができました。

★ **定期総会ご案内** 手稲郷土史研究会の令和2年度定期総会を、4月8日(水)午後1時30分より手稲区民センター2階の第一会議室で開催します。なお、終了後の懇親会は、今回は行いません。